

素朴心理学と消去主義

著者	柴田 正良
著者別名	Shibata, Masayoshi
雑誌名	日本学術会議サイエンス・カフェ in 金沢 『社会認識を哲学する』 発表資料
ページ	4p.
発行年	2009-07-16
URL	http://hdl.handle.net/2297/18475

脳科学の進歩が生活の根底を本当に変えるのか？

1. 素朴心理学

心の働きについての伝統的な理解の仕方

われわれは行為の意味を行為者の心的状態によって理解する（行為の説明）

友人と山道を一緒に登っていたら、5歩先に行く友人が突然に向きを変え、「ダメだ、戻ろう」と言って、私の腕をつかんで道を引き返し始めた。何が起こったのか？ 彼はひどくあわてていて、口をきく余裕もない。わたしは彼の行動を理解するために、彼の心的状態を再構成してみる。

- (1) 彼は、先を歩いていて何かに気がついた。
- (2) そのために彼は道を上るのをやめた。
- (3) それだけでなく彼は道を戻り始めた。
- (4) したがって、彼の気づいた何かは、われわれが道を上っていくことの障害になるものだ。
- (5) それどころかそれは、われわれが遠ざかるべき危険な何かだ。
- (6) なぜというに、彼は「危険を避けたい」と思い、行く手に危険があると思ったなら、道を引き返す」、という〈理由・行為〉の一般的なパターンにしたがっていて、いま彼は道を引き返しているのだから、彼は行く手に何かの危険を発見した、ということになるだろうから。つまり、 $(p \ \& \ q) \rightarrow r$ であり、そして p 、それに r なのだから、 q だったのだろう。

そしてあなたは、振り返った山道の上に巨大な灰色熊がのっそりと姿を現したのを見る。

われわれは、信念や欲求といった心的状態が因果的に相互作用して（原因となり）、行為へと至る（結果を生じさせる）と考える。先の「 p 」は欲求、「 q 」は信念、「 r 」は行為、「 \rightarrow 」は因果関係を示している。もし奇妙な欲求や奇怪な信念を持っていたとしたら、われわれはその人を理解できないだろう。（最近の「オタク系」と呼ばれる犯罪の不気味さは、「殺人の経験をしたみたかった」とか「宇宙から殺人の指令があった」というような行為理由の不可解さにある）。また、文化風習の大きな違いによる「欲求と信念の不可解さ」は何とか克服できたとしても、それらと行為の結びつきが〈合理的〉でなかったとしたら、やは

りわれわれは、彼らを理解できないだろう。

素朴心理学が前提するそのような心的状態の単位は、命題的態度(propositional attitudes)である。それは、事態や事実を表す命題と、それに対する態度の組み合わせによって表現される。例えば、命題「雨が降る」に対して、それを信ずる、それを欲する、それを恐れるなどの態度があるだろう。一般に、 $A(p)$ と書けば、 A は態度、 p は命題であり、それが心的状態のユニット、構成単位となる。

2. 消去主義

常識や科学が前提するある種の存在、過程、性質などは実は存在していないことが判明することがある。例えば、狐つきや、魔女や、あるいはかつてその存在が信じられていたエーテル、フロギストンなどはその実例である。それらの存在を持ち出すような理論は誤りであり、それゆえ捨て去られるべきであり、よりよい理論的説明によって置きかえられるべきである。

素朴心理学がいかに素朴とはいえやはり理論ならば、それが間違っている可能性があり、間違っているならば、他のよりよい理論によって置きかえられるのは少しも不思議なことではない。

素朴心理学が間違っているという状況証拠：

- ・少なくとも 2 千年以上、少しも進歩せずに停滞しているどころか、適用領域をどんどん狭めている（アニミズムから高等動物へ）。
- ・理論として多くの説明不可能な現象を抱えている。例えば、精神疾患の本質、記憶のメカニズム、想像力の本質、睡眠の心理学的意味、2次元網膜像から3次元立体視への変換メカニズム、学習の可能性、などなど。

しかし、最も問題となるのは、素朴心理学が隣接する科学理論（生物学、生態学、進化論など）とうまく適合(フィット)しそうでないということである。例えば、信念や欲求といった心的状態のユニットは、脳の神経生理学的な構造、ニューロンの働きやニューロンの結合様態に対応しそうでないし、信念や欲求の因果関係と同様な因果関係を、神経生理学的レベルの過程の中に見つけられそうでない。

そこで、もしかりに脳神経科学とうまく適合し、しかも人間の心の働きを説明してくれるような新しい心理学理論があったなら、その方が素朴心理学よりも優れているということになるだろう。その候補はある。それは、認知科学に基礎をおいた科学的心理学であり、とくに、認知の基本的な働きをニューロンの働きをモデルにして説明しようとするコネクショニズム的心理学である。

すると、もしこのコネクショニズム (Connectionism) が正しければ、あるいはたとえコネクショニズムが正しくなくとも脳神経科学の発見が正しければ、素朴心理学が前提する心的状態や過程のうちで生き残れるものは、コネクショニズムや脳神経科学が前提する心的状態や過程に還元されるものだけであろう。しかし、両者の前提する心的状態や過程はその基本的性質をまったく異ならせているのである。

3. その結果どうなるのか

コネクショニズムによれば、心的状態は、「**p** である」という信念や「**p** をしたい」という欲求といったユニットとして存在していない。つまり、コネクショニズムによれば、一般に、 $A(p)$ という命題的態度の本質的性質、つまり〈それ単独で存在し、外界とのつながりの点で他の $A(q)$ という態度とはっきりと異なり、それ独自の因果手的役割を果たす〉という性質は心的状態としては実現不可能である。したがって、そもそも素朴心理学とともにわれわれが伝統的に信念や欲求と呼んできたものは、実は存在しないということである。

* 命題的態度の本質的性質とは、〈機能的に離散的で、意味論的に解釈可能で、それ独自の因果的役割を果たす **functionally discrete, semantically interpretable, and playing a causal role**〉という性質であり、つまり、命題的モジュラリティ (**propositional modularity**) をそれがもつということである

例えば、ジョンは叔父のマークを殺害するための二つの別々の十分な理由を持っていた。一つは、マークが死ねば、親戚の少なからぬ遺産がジョンの手に渡ることになっており、ジョンはその遺産をいま欲しがっていた。また、マークは、ジョンの知り合いの（とはいえとくにジョンが愛情を感じているわけではない）女性、メアリーの出生の秘密を握って彼女を長年にわたって脅迫しており、そのためにメアリーは自殺寸前まで追い詰められていた。ジョンは純粋に道義的観点からメアリーを救いたいと思っており、そのためにはずる賢いマークを殺す以外にないと信じていた。

さて、ジョンがマークを殺害したとき、彼はこの一組の理由のうちどちらの理由にしたがったのか、とわれわれは問うことができる。その答えによっては、ジョンの罪は重くも軽くもなるだろう。

遺産狙いか、あるいは人助けか、あるいはその両方か、われわれには分からなくとも、あるいはひょっとするとマーク自身にさえはっきりしなくとも、しかしいずれにせよこの問いにはきちんとした答えがある、とわれわれは考えているだろう。つまり、どれがマーク殺害の本当の理由であったか、ということには神の目から見た「事の真相」があると。

しかし、コネクショニズムによればそのような問いはまったく無意味である。つまり、<どちらかの理由にしたがった>というような<事実>はないのである。また、このような場合、<二つのはっきり区別された別々の理由>がともに有効である、ということでもない。そもそも、ある時点での心的状態のうち、ある行為を引き起こす理由となる部分と、それに関係ない部分という区別すらつけることが不可能なのである。なぜなら、心的状態は、そのような別々のユニットの組み合わせで出来ているのではなく、信念や欲求や気分や感情のすべてがすべてに関与するような仕方で重ね合わされているからである（全体論）。脳神経科学は、このような事態に対してまだはっきりとした見解を表明できるところまで至っていないが、少なくとも、脳神経科学が伝統的な心の理解（素朴心理学）をキレイに裏打ちしてくれるとは考えにくい。むしろ、それを裏切るであろう。

これはほんの一例である。コネクショニズムや脳神経科学が正しいなら、心的状態についてのわれわれの伝統的な理解のどれくらいを誤りだとして放棄しなければならないのか、またどれくらいを無意味な思いこみとして諦めなければならないのか、それはまだはっきりとは分からない。

さらに、素朴心理学の伝統的理解に代えてどのような心の理解が正しいのか、ということもまだはっきりとはしていない。せいぜい確実に言えることは、もしコネクショニズムが正しいなら、心的状態のユニットは命題的態度ではなく活性化ベクトルであり、計算のユニットは命題間の推論関係ではなくベクトルからベクトルへの変形であり、記憶のユニットは命題的記憶（信念文）の貯蔵ではなくシナプスの重み配置であろう、ということくらいである。それはまた、言語中心の心的見方から、言語に中心的な役割を認めない脳中心的な心的見方への転換でもある。

愛や憎悪や道徳や共感といった社会性認識についての研究は、これまで哲学、心理学、認知科学、社会科学、文化人類学などがそれぞれのアプローチで試みてきた。しかし、それらに代わって、あるいは望むらくはそれらを統合しつつ、新たな脳科学的アプローチが台頭してきた。しかし、それがわれわれ人類の生とアイデンティティにもたらす光と陰は、まだ十分には明らかにされていない。

例えば、行為者の責任を厳しく問い、それに厳罰で臨んできた刑罰主義が、そのような行為者を一種の精神的病いにかかった人物とみなす教化治療主義に徐々に替わりつつあるように、われわれの心に対する理解、われわれ自身に対する自己イメージが大きく根底から変貌するかもしれない。

参考文献： P. M. チャーチランド『認知哲学』産業図書、1997.

戸田山・服部・柴田・美濃（編著）『心の科学と哲学』昭和堂、2003